

2017. 12. 13 (水)

境遇からの生きる価値の創出

関根 康正

縁ありて

15分と少しの限られた時間ですけれども、私の最終チャペル・トークとしてお話しします。私は関学に何か縁があったのですね、それまでは東京の大学にいたのですけれども、2011年、突然こちらに来ました。何が言いたいのかというと、どうも生きていくというのは、縁で生きていくという感じで、自分が選んでいる、自分が選んで生きてきたという感覚が私は余りないのです。これまで大学が変わるときに、自分で応募して移るということではなく、何かわからないけれども、声をかけられて、どうしようかなと考える。そしてそのときだけはポジティブで、ちょうどタイミングよく声をかけられると、応えてしまうのです。住んだこともない、生まれた場所でもない、研究者の間柄はいるのですけれども親戚もいない、こういう関西へやってきたのです。ひとつの運命でしょうか。

与えられる境遇

今日、短い時間で何を話すか、とても難しく、昨日は悩んでいました。ともかく、今、運命と言ったのですけれども、境遇というのを最近よく考えるのです。境遇という

のは、自分で選んでいる部分は少なく、例えば私は、私の両親から生まれたのですけれども、何で生まれたか、分かりません。両親たちも、何で産んだか、よく分からない訳です。そうやって人類はずっとつながってきたのですけれども、だから偶然の連鎖なのです。うちの母親と父親のどちらかが違う人だったら、私はいないのです。奇跡の連続みたいにして皆さんも生まれてきたのです。このような偶然の境遇というものは考えてもしようがないのだけれども、でも、最近、そういうことをよく考えます。

つまり、主体的で能動的であるということは大数であると言われても、私たちが生きていくというのは、大体、全然主体的ではなくて、受動的なのではないかと思えます。人生の最初の出発点が、自分が選んでいなくて、生まれちゃっているわけですから。生まれちゃったから生きていく訳です、死ぬまで。これが厳然たる事実で、では、生まれちゃった命をどうやって生きていくかということは、当然、我々の課題になるということ、そういうことをめぐって悩みながら生きていく訳です。

それで、生まれちゃったのだから、しかも命が生まれちゃったというだけでなくそこに境遇があるわけです。例えば、ある人は経済

的にとてもリッチな家に生まれて、お坊ちゃん、お嬢ちゃんになる人もいれば、私などのように、どちらかという貧しい家庭に生まれる人もいます。私は小さいころ自分の家はなぜ貧しいのだろうと、子ども心に考えました。考えてもよくはわかりませんでしたけれど、自分の家だけが貧しいという深刻さはありませんでした。子どもの頃は余り分からなかったけれども、その後は親の話なども総合して、やはり戦争が基本的に悪いんだと思うようになりました。第二次世界大戦です。父方も母方も戦争で大変な変化を余儀なくされました。

戦争による断絶

うちの父親は、満州、今の中国の東北地区に出かけて行ってしまったのです。なぜかという、父親のおじさんが、そちらで会社を経営していて羽振りがものすごくよかったんです。ちょっと来ないかと言われて行ったようです。うちの母と結婚したばかりの新婚ほやほやで満州に行っている生活をしていたのですが、それで結局は引揚者になった訳です。若い人は、引揚者って分かりますか。その戦争の最後の局面では連合国の一つとしてソ連の兵隊が満州に南下してきて大変な状況になりました。それで、うちの母親から聞いたのだけれども、女性だと、それこそ襲われたりするから、坊主にして、男みたいな格好をして、長男の私の兄は幼児でしたが、泣かないように隠れていたんです。本当に屋根裏みたいなところで、黙らせて、潜んでいたこともあると。肺結核をした父親でさえも最後は徴兵され、その局面では父の隊は解散してそれぞれに家族のもとに歩いて夜を徹して

帰っていったのです。とにかく家族で引き揚げて、佐世保港に着いたのです。そして、シラミとか頭に付いていたのでしょ、今は使わないのだけれども、消毒に使う DDT を頭からぶっかけられたのだそうです。その後の父親の社会復帰がお坊ちゃん的だったと思いますが、うまく対応しなかったので東京での貧乏暮らしになったんです。父は次男ですから、財産を全部長男に譲るという遺産相続放棄していました。これが慣習法の世界ですね。ますます文なしです。父自体は裕福な家で大事にされて育ったので金より知識の方の人でした。戦争がなかったら、地元で教員か公務員になっていたかもしれません。けれど、その戦争によって、そういう道はバサッと切り落とされてしまったわけです。

戦後 GHQ の占領下で農地改革というのがあったのです。両親は両方福島県が出身で、そこではそれぞれに結構大きな土地持ちの家（医者と村長の家系でした）だったんです。つまり家格も上で金持ちだったわけです。ところが、母親の方は、農地改革で不在地主といって、そこに住んでいないで東京にいたもので、ものすごい量の土地を強制的に持って行かれてしまったのです。そのうえ、東京空襲で群馬に疎開した時に東京の土地を二束三文で売却してしまったのです。父親の方は次三男は家督なしで長男が財産を独占してしまいました。こうして戦争と戦後に荒波の中で、我が家は結局貧しい家庭になっていったのです。もっといろいろな理由は交差していますが、引き揚げてからは群馬に住んで父は洋品屋を営み、やがて東京に出てきて印刷会社で仕事をやっていました。どうにか食べてはいられたけれど、家計は大変でした。そういうところに生れ落ちる、そういうのが

1つの境遇なのです。

大した話ではないけれども、言いたいのは、戦争というものをもたらすものすごい影響ということです。人々は翻弄され多くの悲惨がもたらされます。だから、戦争はしないほうがいいのです。しかし皮肉なことです。その日本は、1950年代から、朝鮮戦争という隣の朝鮮半島の戦争が特需をもたらしてそれをきっかけに、日本が経済成長を始め、経済的に豊かになっていったのです。朝鮮半島が二つの国に分断される戦争で日本は豊かになっていった。ここでも、戦争というものが経済と連動していることがわかります。詳しくは言いませんが、現在の世界でもそうなのです。第二次大戦後も平和のためだと主張しながら戦争経済が実行され続けているのです。

それはそれとして、1人の人生に対して、やはり強烈な、決定的な断絶と転換を起こしてしまうのが戦争です。戦争は恐ろしいという話をしに来たのではないのですけれども。ここでは境遇の話でした。つまり、境遇は自分にとって受動的な形でそこに存在しているのです。そうすると、課題は何かというと、その目の前の境遇をどうやってポジティブなものにしていくかということになります。貧乏だ、俺はもう駄目だというのではなくて、ああ、貧乏か、さてどうするかと。

社会苦としての貧乏

私は、小学校のときは結構ませていて、なぜ、自分の家は貧乏なんだろうと考えて、なんとなく社会が悪いだろうと、私は思ったんです。こここのところが少しいいでしょう。自分の家が貧しい、それは父親が稼ぎが悪い

からなのは明らかですが、それだけでなく、中小企業に勤める父の稼ぎが悪いのはなぜかと考えたのです。きっと社会が悪いんだというふうに。その頃から、自分の周りの苦労とか問題は、多分に社会問題の側面があるというように私は感じていました。だから、1人だけの苦労じゃないんだ、私だけの苦労じゃなくて、みんなの苦労のはずだと。実際、他にも貧しい人はたくさんいましたから。だったら、別に経済的な意味だけじゃなくて、いい社会を一緒に作って豊かになりましょうと、思ったわけです。

それが、皆さんに対してのメッセージにつながるのです。自分の身の上に起こっている不幸は、自分だけに起こっているわけではないということです。社会の在り方に問題があることが多いのです。それは自分の欠陥の言い訳として社会のせいにするのとは違うのです。社会システムとは、そこに必ず問題を抱えているのです。だから、問題を皆で共有して一緒に考えたほうがいいと思います。自分の苦悩はみんなの苦悩だと思って、社会苦という言い方があるのです。社会の構造から起こる苦しみ、社会苦です。つまり、自分の苦は社会苦でもあると考えたほうがいいのではないかと。私は割とそういうふうに考えています。

さて、それで、貧しい家庭だったわけだから、豪邸に住んでいる訳ないでしょう。自分の家は大した家じゃないなとわかって暮らしていましたけれど、その影響もあったのでしょうか、なぜか、私は空間に興味があって、建築家になろうと思ったのです。建築家というと、カッコいい職業になっていますけど、私はコルビジエのようなカッコいい建築家になろうと思った訳じゃなくて、なるべく安い

コストで、とてもいいデザインの家を造りたい、そういうことに貢献する建築家になりたいと思っていました。まことに真っ当な小学生でした。小学校5～6年に、建築家になろうとはっきり思っていました。でも、その理由は、どちらかという表向きで、本当はもっといじらしいもう一つの理由があったのです。

というのは、人と付き合いたくない人間だったので、会社のような集団で仕事をすることは嫌だなと思っていました。だから、できれば、そういうところには行きたくないと思っていました。人と一緒に仕事したくない、人と余り会いたくないという、変な子どもだったので。あと、学校へ行くとすぐ気持ち悪くなっていたりしました。子どもの浅知恵で建築家になれば部屋にこもって一人で図面を書いていけばいいんだと思ったんです。それが理由です。

生きる価値の創出

ちょっと話が一挙に飛びますが、時間がないので、話してきたように、私たちはみな、生まれてしまって、それで生きているわけですから、生きている価値なんてものが前もって客観的にあるなんてことはない訳です。では、どうするのか？ それは、自分で作れない訳です。生きている価値は、自分で考えて、作り出すということです。例えば、子供に将来は何になりたいとか聞くと、そうすると、子どもはパイロットになりたいとか、何か言いますね。子どもだから当たり前ですけど、価値を職業に置き換えて考えるのは子供では仕方ないけれど、大人になってもそうしては、それでは価値の創出からすると

かなり初歩的レベルにとどまる話ですね。子どもの頃は、私は電車の運転手になりたいとか言うので、それはそれで出発点としてはいいのだけでも、もうちょっと大きくなると、職業と価値とは無関係ではないけれど簡単には一致しないことがわかってきます。

私の場合も、結局、小さい時に思った建築家になる夢の実現のために大学の建築科を選んで入ったんです。入っただけけれども、入ってからは、いろいろな想像を超えた出会いがあって大学生活が楽し過ぎました。皆さんはどうですか。私の場合、高校までは全然つまらなかった。大学に行って、目が覚めるぐらい、こんなに楽しい場所があるんだと。あの頃、国立大学の学費は月3000円だったし、大学院でもらった奨学金は今みたいに利子付きのローンではなく、教育職につけば返済なしでした。それ以上に、素晴らしい先生方に出会いました。入った大学は理工学部で、私は工学部の学生だったので。そこで、いま思えば運命的に一般教養担当の高名な二人の文化人類学者に続けてお会いすることになりました。普通には考えられませぬような偶然のタイミングでの出会いでした。工業大学で、ずば抜けて優れた本格的な人類学者（人文社会系の学者）に連続して会ってしまったのです。1人目は川喜田二郎先生で私は学部の1年生でした。2人目は私が3年生ぐらいのときに赴任された岩田慶治先生です。工学部の学生は、その先生方には一般教養の授業がありますからみんな会っているのだけれども、普通は出会うことはない。しかし、私はなぜか出会ってしまって、運命が結局変わっていくのです。

問題意識と出会い、そして使命

何で出会うかという、こちらの問題意識にかかわってきます。簡単にいうと、問題意識とは、自分が生きていることにおいて何が問題であるか問う思考です。自分は何をした人間かということです。自分が何かしたいと思っていると、その問題意識に触れ合う人間に出会うこととなります。だから、同じ場所にも問題意識が共有できなかったりすると出会わない。自分の問題意識が余りなかったりすると、みんな通り過ぎていくでしょう。そういう中で、出会うというのは運なのです。運のだけれども、問題意識があって起こる運なのです。そうやって出会いが重なり、問題意識の線が太くなっていくと、だんだん自分の行くべき道が見えてくるのです。

時間がないので、一挙に難しい言葉を言ってしまうんですけども、使命という言葉がありますね。使命に生きるなんていうことは、凡人はなかなかできないのですけれども、それでも、自分が生きる価値を作り出すということは、それを突き詰めていくと必ずや使命と言えるようなものに結びついていくのです。使命というのは、自分の欲望の追求と真反対です。自己犠牲をしてでもそれを成し遂げねばならないという大きな力に動かされる創造力です。小欲ではなく大欲ということです。ですから、自分が建築家になりたいなんて、結局はどうでもいいことなのです。何かにやりたいなんていうのは、結局は、最終的にはどうでもいいことであって、それ自体は使命でも何でもありません。ただ、私の中では、社会的にローコスト・グッドデザイン・ハウスを実現普及するというのは、少しばかりは使命の萌芽みたいなものはあるかなと思

いますが。まあ、そんなのは大したことはないわけです。だから、職業を選ぶなんていうことは、それ自体では大したことではない。私は人類学をやってきたけれども、別にそれ自体は大したことではなくて、肝心なことは何をどのようにやるかなのです。人類学者は世の中にいっぱいいるのですけれども、問題は人類学であなたは何をどのようにやっているのですかということなんです。つまり、中身が詰まっていなければ駄目なのです。その中身として詰める価値は、その人間の問題意識の鍛錬と精錬にかかっているわけです。事実、世の中には悪徳弁護士から善良弁護士までいるでしょう。弁護士という職業自体が偉い訳でも価値があるわけでもないのです。良い価値を生み出す弁護士でないと駄目なんです。そうでないと、ちゃんとした弁護士にはなれないのですし、世の中のためにもならないのです。

すでにお話したように、問題意識からいろいろな人との出会いも生まれて、だんだん自分のやるべきことが定まってくる、そういうことが実際に起きるのです。私の場合は、最初に言ったように、自分で選んで次の大学に移ったことはないのです。声をかけられたときに、いいかなと思うと移ったのです。また、これも運なのでしょうが、いいときに、声をかけてくるのです。ちょうど、子どもが就職して自立した時に、「関西学院に来ないか」と。子どもの面倒を見る義務は果たして自分は自由になったなと思っているところに、ちょうどいいタイミングで声がかかってきたというわけです。このタイミングが、もしも1年前に来たら、私はここに来ていないのですし、1年後にあっても来ていないかもしれないです。大学との出会いもそういう

ことで不思議なものです。

体験の経験化

最後に、では問題意識というのはどうやって見出すのかということを確認します。一言でいうと、日常的に「体験の経験化」に努めるということです。これは森有正という哲学者が昔、言ったことなんです。体験は誰でもみんなしているのです。だけれど、それを経験化することには努力がいります。体験を反芻して、反省して、自分は何やっているのかなということを見つけていくプロセスが経験化です。それで、初めて体験が経験として自分の身につけていくということなのです。

だから、体験を経験化するという意識化が問題意識を醸成させ、それを通じて出会いがある。そうして、自分の問題意識がますますいい方向に育っていく、うまくすると使命のようなものに行きつくかもしれません。こ

んな短い時間でうまく伝えられませんが、また偉そうなことも言えない我が人生ですけれども、振り返って、若い皆さんへのメッセージとして少しばかり話をさせていただきました。

とにかく、7年間という短い期間なのですけれども、この関西学院大学においてとても新鮮な体験と経験をさせていただきました。私の中の日本地図が確実に広がりました。東日本は知っていたのだけれども、西日本は余り知らなかった私にはよい勉強でした。もちろん東京にいたときから国立民族学博物館の研究会などで関西にはよく来ていましたが、住んだことがなかったので知らないことばかりでした。そういう意味では、ここでの仕事と生活は本当に私の人生を豊かにしてくれました。そういう意味で本当に感謝しています。ありがとうございました。

(社会学部教授)